

原発〇にむかって

2011年11月16日 No.3

<http://www.tokyominiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel: 03-5978-2741 fax: 03-5978-2865 mail: sien@tokyominiren.gr.jp

いわき市でフィールドワーク研修を開催

10月26日(水)、東京民医連看護管理者研修で観光バスを貸し切って39人が福島県いわき市への日帰りフィールドワークを実施した。

現地では浜通り生活医療協同組合の伊東達也理事長(右写真左下)を講師に、車中から当時の津波の被災状況を聞きながら見学。放射線量を測定しながら福島原発立ち入り禁止区域の検問所まで行ったが、小名浜生協病院のあるのどかな雰囲気のある40km圏から30km圏内に入ると、人の姿がほとんど見られなくなり、雨戸が閉められたままの家が増えてきた。20kmの検問所では警察車両2台に行く手をさえぎられた。その時、原発作業員を乗せたバスが私たちの横を通り過ぎ、検問所を通り抜け禁止区域へと入って行った。



見えない放射線の恐怖

検問所手前まで何の変化(空気や、匂い、色)も感じないのに、線量計の数値は間違いなく上昇して行く。この状況に、『見えない』、『感じられない』放射線の恐ろしさを実感した。



その後、伊東氏が開設する障がい者の作業所で、原発事故により双葉郡の施設から避難を余儀なくされた支援相談員の高市貴之氏(写真左)からの報告と小名浜生協病院の天野綾看護師長(写真右)から、地震発生時の状況と病院での対応、管理者としての対応と教訓などをお話いただいた。最後に伊東氏から、「放射線についての講義と冷静に対処することが大切、これからは『謝れ、償え、なくせ原発』を合言葉に原発〇への運動をさらに進めていくうえで、皆さんも力を貸してほしい」と締めくくられた。



被災地を孤立させないとりくみ続けよう

参加した受講生からは、「バスから見た海岸沿いは生活感も戻っており、風光明媚な景色の中に津波や地震の爪あとが残る中に、人のたくましさと自然の脅威を感じた。また軍事基地のような検問所は、その復興の様子とは裏腹に、いつ終わるともしれない恐怖と怒りを感じた」、「原発事故により閉ざされた町の風景本来あるべき姿ではない景色に生まれて初めて『言葉を失う』という経験をした」、「福島への悩み・怒りを伝えてほしい」という伊東氏の言葉に今回の研修で見た聞いた現実を伝えていかなければと強く思った」、「百聞は一見に如かず、現地に行って自分の目で見て確認することの大切さを再確認できた。そこから共有し想像し行動することが大切」、「福島での看護師さん達の緊張の糸が切れてしまわないよう長期の支援を続けなければ」などなど、短い滞在時間にも関わらずフィールドワークならではの学びが述べられた。今回のフィールドワークを実現して下さった伊東氏、天野氏、そして、案内していただいた事務職員の皆さんに感謝したい。

(東京民医連事務局 井澤有里美)

都内でも放射線から子どもたちを守るための葛藤が

先日、小西恭司全日本民医連・緊急被曝事故対策本部長が都内で原発問題の学習会の講師をした際、会場となった小学校に子どもを通わせているお母さんが、「友達が夫を残したまま、子ども3人をつれて京都に引っ越した。子どもの健康を最優先するのが母親の役割だから、自分も避難しようと悩んでいる」旨を涙ながらに話されました。集会終了後、小西医師はお母さんに頼まれ、小学校周辺の放射線量の測定をしました。都内でも放射線から子どもたちを守るための葛藤をしている方がいます。「放射線量測定中」の「のぼり旗」も活用した放射線測定運動を一気に拡げて、地域の方との対話をすすめましょう。(東京民医連事務局 齋藤 裕幸)